

巻頭に寄せて

院長 鈴木彦之

今年新しい編集委員会によって市立病院誌第14号が刊行されました。救急センターの変わらざる受診者の増加、週休二日制の実施による一日外来数の増加、さらに老人性痴呆疾患センター外来の開設などますます繁忙の度を増す中での発刊ですので、そのご苦勞を多と致します。

ところで、この平成5年は前記の老人性痴呆疾患センターの開設により、これまでの高度医療・救急医療を中心に据え、研修教育とともに、急性期疾患の完結的対応を志向する運営方針に加え、本市の豊齡化福祉計画に沿い、老人医療にも踏み込んだ年として病院史上に記録される年になろうかと思えます。5年度は360人の痴呆性疾患の初診前医療相談、鑑別診断、治療、処遇の選定を行うことに止まりましたが、6年春の診療棟の完成により、振り分けセンターとしてより本格的・効率的運営を行って参りたいと考えております。救急センターの経験から、当センターの円滑な運営には保健・医療・福祉の連携即ち老人性痴呆疾患の診療システムの完備が前提となりましょうが、本院としてもこのシステムを支えるための機能と機構を将来構想の中でも検討していかねばならないものと思えます。痴呆性疾患の予防・診断・治療とも未開明の分野を多く残しており、この方面の研鑽・研究にも今後積極的に取り組み、その成果が本誌を飾る日を期待しております。

ところで、全国自治体病院協議会雑誌3月号に剖検の意義と題し、臨床と病理の結びつきについて旭中央病院院長の諸橋先生が寄稿され、その中で5年度の旭中央病院の剖検数は425体、剖検率71.5%であったと報告し、先の厚生省の審議会が特定機能病院の指定にあたり、剖検率が13~20%の大学を許可されたことに言及し、研修医の教育に大きい責任をもつ大学の指定の在り方に疑問を投げ掛けられております。また画像診断は剖検診断に比し20%の誤りがあるとするJAMAの論文を引用され、病める臓器、転移像全体の把握は剖検より得られるものであり、剖検に熱心であった研修医ほど研修成績は良く、よい医師に育つことを強調されて居られます。当院の剖検数・剖検率は年々低下の傾向があり、この対策については医局の皆さんとも検討し、その中で高齢の患者がふえ、しかも経過が長期化し、また悪性疾患の死亡例の増加などから家族の了解が得られにくいことなどの状況にあり、一方臨床検査・画像診断・生検診断の進歩による生前診断が確実にまた容易になったことから剖検診断の評価が低下していることなどが原因としてあげられましたが、先生の言を踏まえ、同じ医療環境の中での旭中央病院の剖検率の報告を深く受けとめねばならないものと思えます。剖検はただお願いして出来るものではなく、医療スタッフの診療時の熱意と誠意が評価された上にさらに診断・治療の反省をこめて剖検をお願いする謙虚さが家族に伝わる必要があると思えます。今後なお剖検にかかわる諸条件を検討され、剖検率の向上とともにその検証と反省が記録として本誌に発表され、本誌が一層レベルアップされることを期待して巻頭言に代えます。